

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401,044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第107号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
 「川崎の文化財」-7

早野上ノ原遺跡—旧石器時代から近世までの複合遺跡（1） ===川崎市域における旧都筑郡内の遺跡===

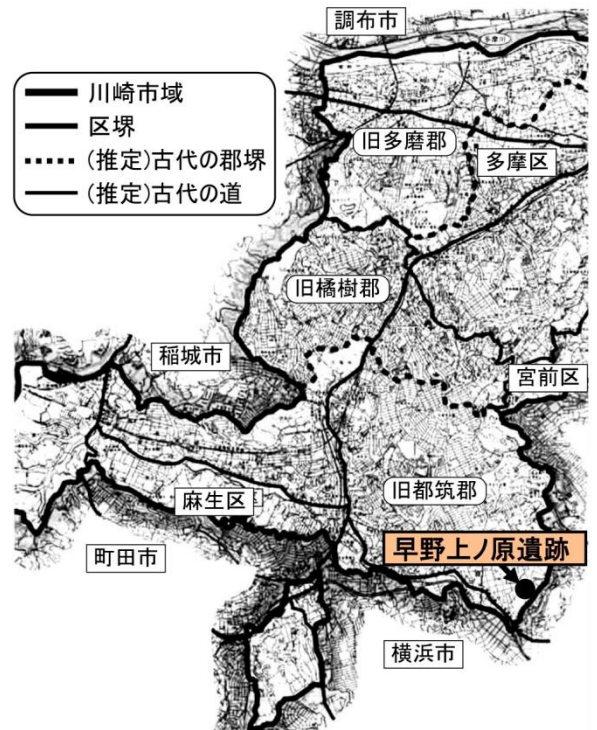
川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 栗田 一生

昨年からはじめた本シリーズですが、最初は川崎市初の国史跡に指定された橘樹官衙遺跡群を知っていただければということで、これまで6回にわたりお話ししてきました。まだまだお話ししたいことはありますが、橘樹官衙遺跡群は一先ず終了とし、今回からいよいよ柿生郷土史料館も所在しています、川崎市域における旧都筑郡内の遺跡を取り上げたいと思います。この旧都筑郡の地域は、川崎市の北西側に位置し、大部分が丘陵地帯ですが、丘陵の間を流れる鶴見川水系の河川に沿って一部低地部が広がっています。この地域は、市内でも有数の遺跡密集地帯であることから、これまで多くの発掘調査が実施されており、川崎市の歴史を知る上で貴重な資料や成果が得られています。そこでしばらくは、これまでの調査で貴重な成果が得られた旧都筑郡内の遺跡を、みなさんに紹介していきたいと思います。

最初に紹介する旧都筑郡内の遺跡は、麻生区早野に所在しています早野上ノ原遺跡です。少し話がそれますが、みなさんは、川崎市内の遺跡の名前をどのように付けているか知っていますか？すでに分かった方もいると思いますが、近年における川崎市内の遺跡の名前については、「大字+小字」とすることを原則としています。今回お話しする早野上ノ原遺跡も、大字が早野、小字が上ノ原に遺跡が所在しているので、この名前が付けられました。川崎市内では、住居表示化の進展によって、各地で歴史ある地名が失われつつあり、非常に残念な状況ですが、せめて遺跡の名前だけでも過去の記憶として地名が残ってほしいと思います。話がそれてしまいましたが、この麻生区早野字上ノ原に所在している早野上ノ原遺跡は、早野聖地公園事務所の南側に位置する丘陵上に位置しています。すぐ近くには、殿様の墓（富永重吉とその一族の墓）として有名な4基の五輪塔が見られるなど、歴史の薫り漂う地域です。遺跡は、早野聖地公園の拡張事業に伴う事前の発掘調査として、平成19～21年度に調査が実施されました（早野上ノ原遺跡第1～3次調査）。その結果、市内でも少ない、旧石器時代から近世までの各時代の遺構・遺物が存在する複合遺跡であることが分かりました。

遺跡の内容を簡単にお話しすると、旧石器時代としては、市内最古級の約3万年以上前の旧石器が出土しました。宮前区菅生ヶ丘に所在する鷲ヶ峰遺跡で出土した旧石器（川崎市重要歴史記念物）とほぼ同時期の石器群で、当時の市内における人々の活動を推測する上で貴重な資料といえます。縄文時代では、中期中葉から後葉にかけての環状集落が発見されました。まだ調査が行われていない部分もありますが、中心に広場があり、その周囲に住居が建てられている様子が明らかになってきています。弥生時代では、現在のところ、鶴見川水系で最も上流にある集落跡が発見されました。古墳時代では、この地域で初めて古墳が確認されました。この地域は横穴墓を構築する集団がいたと推測されてきましたが、この古墳の発見で、この地域の古墳時代について改めて考える必要が出てきました。奈良時代・平安時代は、掘立柱建物を伴う集落跡が発見されており、その奈良時代の住居からは、古代の布目瓦が出土しました。中世においては、丘陵を囲むように溝が巡らされていることが確認されるとともに、その内側をいくつかの区画に分ける溝が掘られていることも分かりました。さらに道であった可能性が高い遺構や地下式横穴なども発見されるなど、中世の土地利用の状況を推測できる資料が得られています。近世は、耕作に伴うと考えられる土坑などが発見され、現在につながる土地利用が見られました。

このように、早野上ノ原遺跡は、まだ遺跡の一部について調査が実施されただけですが、この地域の歴史を明らかにする上で、貴重な資料が得られています。しかも、これまで畑や山林であったことや、その後早野聖地公園整備のために市が公有地化したため、遺跡が良好に保存されており、各時代の集落のほぼ全体を調査することが可能な遺跡です。今後、調査を実施する機会があれば、現地見学会などを開催し、早野上ノ原遺跡の価値を広く知ってもらえる場を作りたいと思っています。



第1図 早野上ノ原遺跡の位置

シリーズ「麻生の歴史を探る」 第77話

徳川入府 (3) ～検地(お縄打水帳)

小島 一也 (遺稿)

関東に領地を得た徳川家康は直ちに領内の検地を始めます。検地とは今でいう国土調査で、通常検地の方法は、1間が6尺1寸～5寸(年代によって異なる)とする検地竿を使い、縄を用いて地面を測量するもので、田・畑はその生産高によって、上・中・下田(畑)の等級がつけられ年貢高の基準になり、屋敷、湖沼も測量されますが、山地は対象外であったようです。この測量台帳を「検地帳」とか「お縄打水帳」とか呼びますが、岡上の梶家には川崎市内で最も古い、天正十九年十月九日～十四日(1591)の検地帳が保存されています。

川崎市史によるとこの岡上村の検地は、代官伊奈忠治(領主ではない)と配下役人2名、それに村内の有力農民森彦三を筆取り(記帳責任者)に実施したもので、「武州都筑郡小机之内岡上村御縄打水帳」と記されたものが6帳、その他に「屋敷御縄打水帳」が1帳、合計7帳で、村の耕地面積は、田15町6反5畝23歩、畑21町3反2畝26歩、屋敷7反7畝19歩とあり、合計37町7反6畝8歩とされています。

		町	反	畝	歩
田	上田	1.	5.	7.	10
	中田	5.	5.	1.	19
	下田	8.	5.	6.	24
	小計	15.	6.	5.	23
畑	上畑	5.	1.	4.	18
	中畑	5.	3.	0.	28
	下畑	10.	8.	7.	10
	小計	21.	3.	2.	26
屋敷	7.		7.	19	
合計	37.	7.	6.	8	

天正19年 岡上村の田・畑・屋敷

当時、このお縄打水帳には番地はありません。せき下・河内・藤乃木・窪田など30余の小字が付されて、一筆ごと、地積、田畑の等級、耕作者名が記され、さらに耕作者名には「主作」「大す三作」が付された56名(戸数ではない)の記載があります。これは分付主(地主)が所有地を自作地として



天正19年岡上村検地帳 - 岡上 梶家蔵一

いるか、分付地(貸地、小作地とは違う)としているかをあらわしたものです。分付主が分付地に行っている割合を見ると、田畑の合計365筆中、157筆が分付地、面積で調べると、分付主15名で田畑の約40%に当る15町3反歩余を分付地としています。県史によるとこの最高所有者は「織部」と称する者ですが、岡上の住民ではなかったようです。また、屋敷の所有は又兵衛(280坪)、左京亮、又右衛門など13名の名前がありますが、彼らが岡上村内の土豪百姓と思われるます。

こうした徳川氏による天正十九年の初期検地は岡上村だけではなく、市内では下小田中・井田・苅宿・高石でも行われております。新編武蔵風土記稿は高石村の項で、検地水帳の存在を記しながら、検地人を知らず、とありますが、名主兵右衛門の先祖吉沢民部が村を開闢、村の民五苗により開墾されたと伝え、当時名主等によって検地があったことを思わせます。細山村の検地を前記風土記稿で見ると、「文禄三年(1594)八月六日検地のことあり、この時の水帳を見るに都筑郡小机の内細山郷」と記され、「小宮山八左衛門が奉行し、土方・白井・三輪・宮田なる者ども荒地を開墾し……」とあります。「武州都筑郡小机庄内細山郷御縄打水帳」は6帳からなり、案内人に蔵人・主水の名が記入され、田畑面積は破損で読み取れませんが、分付主には蔵人や主水などの名が記載されています。この水帳は西生田小学校に保存されていると言われています。

片平村にも文禄三年(細山と同年)の「武州都筑郡片平郷御縄打水帳」があります(片平安藤家蔵)。記載型式は岡上村と同じで、代官大久保長安配下の竹川監物ほか1名の検地役人と、案内人は源六・市左衛門という村の有力百姓によって行われており、田畑合計12町6畝24歩、屋敷は合計1町1反7畝5歩と記帳されています。また、この安藤家には、5年後の慶長四年(1599)の「武州都筑郡片平村御縄打水帳」も残されており、それによると検地役人は前回同様竹川監物ほか2名で、案内人は源次郎と記され、96筆、田畑合計5町9畝24歩、屋敷分は19筆7反6畝19歩とあるそうですから前回の不作地の開発があったのではないのでしょうか。

参考資料:「新編武蔵風土記稿」「川崎市史」「江戸近郊農村と地方巧者(村上直)」

シリーズ

時間と時計の話 第2部

時計と時間の観念(12)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆戦争と腕時計◆

腕時計の普及は、第一次世界大戦がきっかけになったと言われるのですが、実際に腕時計が使用されるようになったのは、もう少し早く、1880年代のことでした。スイスの時計メーカーとして知られるジラルール・ペルゴー社に、同社がドイツ海軍の注文を受け、1880年に士官用の腕時計を10個以上製造したとの記録が残されています。と言ってもそれは同社に保存されていた1枚の伝票なのですが……。伝票は、腕時計の鎖が当初予定されていた光沢タイプから、艶消しタイプの金鎖に変更されたため、艶消しタイプを納品したことを書きとめています。光沢処理の金鎖では、太陽の光を反射してしまうため、自軍の位置を敵軍に知られてしまう危険があるからです。ただ残念なことに、この時の腕時計は「幻の腕時計」と化しており、ペルゴー社が高額の賞金付きで探しているのですが、今日に至るもただの1個も見つからず、写真も見いだせずにいるのです。

それから10数年、1899年～1902年まで世紀をまたいで戦われたボーア戦争(南アフリカ戦争とも呼ばれますが、ボーア人と呼ばれる当地に植民して土着したオランダ系白人と、この地を乗っ取ろうとしたイギリスとの白人同士の戦争です)の最中に、イギリス人将校が腕時計をはめていた写真が残っています。ボーイスカウトの創始者として名高いベイドゥン・パウエルの部隊が、ゲリラ戦に勝利した記念に撮影された写真です。左下隅の兵士の左腕に、はっきりと腕時計が映っています(写真1)。外にもあります。写真写りが良くないので、ここには掲載できないのですが、1898年の米西戦争(アメリカとスペインの戦争)の際に、当時スペイン領だったキューバに侵攻したアメリカの義勇兵部隊の兵士が左手首に腕時計をはめている様子が、勝利の記念写真に残されています。実は、この部隊の隊長は、後の米国大統領で日露戦争の講和を斡旋したセオドア・ローズヴェルトその人だったのです。



写真1 前列左の部下の左手に腕時計

これらの事実は、いずれも断片的で、当時の将校の中に腕時計をしている者がいたという事実しか証明してくれません。腕時計の普及はいつごろのことか。どの国が腕時計の普及に先鞭をつけたのか。この点を考えると、とりわけ男性用の腕時計の普及という点では、1900年の北清事変や1904年～05年の日露戦争当時の日本軍が浮かび上がってくるのです。さすがに女性用のアクセサリを兼ねた腕時計となると、欧米の方がずっと早いのですが…

時計の針をもう一度19世紀末に巻き戻してみます。写真2は、日清戦争終結後の1895(明治28)年5月3日に近衛師団を撮った写真です。中央の腕時計をはめた人物は、近衛師団長北白川宮能久親王です。この写真が日本人の腕時計姿が確認できる最初のもので、ところで、当時の中国(清国)は、1894年～95年の日清戦争に敗北したことで、雪崩を打つような欧米列強の侵攻にさらされ、列強への従属を強めていた時期でした。そうした清国の不甲斐なさに怒れる民衆が立ちあがり、特に華北一帯での抵抗運動が草原に広がる野火のように、激しく燃えあがったのです。歴史上「義和団運動」と呼ばれる運動です。この運動は1899年に始まって拡大を続け、翌1900年6月には北京や天津を占領、北京の各国公使館を包囲して、各国の外交官を人質にとったのです。



写真2 北白川宮能久親王の左手に腕時計が

この事態に、英・仏・露・米・日・独・伊・墺(オーストリア)の8カ国は、連合軍を派遣して鎮圧にあたりました。日本で「北清事変」と命名されているこの戦争では、華北に最も近いという地の利を生かして、いち早く軍隊を派遣して多くの犠牲を払いながらも、北京を解放して各国外交団を救出した日本軍の活躍が際立ち、各国の称賛を浴びました。各国の新聞は、揃って日本軍の活躍を称賛した特派員の現地報告を掲載しています。なかでも「ロンドン・タイムズ」の特派員ジョージ・モリスン記者は、日本軍を評して「日本兵は、伍長ですら腕時計・羅針儀・双眼鏡を携帯している。日本の砲兵隊も補給隊も実に素晴らしい。その日本軍の唯一の弱点は、騎兵隊の乗馬が貧弱で劣っていることである」と、書き送っています。

いかがです。英国軍や米国軍では、一部の将校のみが腕時計をしていた時代に、日本軍では伍長という、兵卒に最も近い下級の下士官までもが、腕時計をしていたというのです。イギリスの敏腕新聞記者は、さすがにこの事実を見逃さなかったのです。当時腕時計は高級品ですから、伍長が個人で時計を購うことなど不可能です。腕時計は、明らかに軍によって支給された品、羅針儀や双眼鏡と共に下士官の標準装備品であったと考えられるのです。腕時計の普及に日本も多いに貢献していたのです。

(続)

柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

4月 1・8・15・22日(毎土曜日) **5月** 7・21・28日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (4月29日、5月14日は休館です)

柿生郷土史料館友の会 第6回史跡見学バスの旅

浅草寺伝法院庭園の特別公開と和時計のルーツを探る

日 時 2017年4月20日(木)

主な見学先 国立科学博物館、浅草寺・伝法院庭園と大絵馬展、セイコーミュージアム 等

集合・解散 : 7時45分 新百合丘駅北口 ~ 午後6時頃 (新百合丘駅北口→柿生駅付近)

費用 : 7800円

申し込み : 往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで 先着順 44名

必要事項 : 参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先 : 215-0021 川崎市麻生区上麻生 6-40-1 柿生中学校内 柿生郷土史料館

申込締切 4月10日(月) 問合せ先:小林基男 (080-5513-5154 または 044-989-0622)

第67回 カルチャーセミナー

国史跡・奈良時代の役所と寺院

川崎北部の遺跡発掘調査を、長年に渡って担当された村田先生に、その発掘の成果を踏まえて、武蔵国、橘樹郡衙の所在とその概要、さらには、関連施設でもある影向寺の姿、そこに生活した人々の精神世界にまで、踏み込んでお話しいただきます。

講師:村田文夫氏 (川崎市民アカデミー副学長)

日時:4月15日(土) 13時30分～ 会場:柿生郷土史料館特別展示室

【訂正】 前号第106号の当記事において、「武蔵国橘樹官衙遺跡群の古代学」の著者名を間違えておりました。正しくは村田文夫氏です。お詫びして訂正いたします。

柿生中学校創立 70 周年記念事業協賛企画

第68回 カルチャーセミナー

近代日本の教育制度

～その2 学歴主義と教育の普及～

講師:小林基男氏 (柿生郷土史料館 専門委員)

日時:5月28日(日) 13:30～ 会場:柿生郷土史料館特別展示室

第12回 特別企画展

「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔

～その1 昭和時代の柿生地区～

「くらしの窓」は昭和30年創刊の地域のミニコミ誌です。

昭和の末までに、およそ600号まで発行されました。

昭和時代の「くらしの窓」は、柿生地区のどのような姿を捉えていたのでしょうか。

その捉えてきた地域の姿をご紹介します。

期間:3月19日(日)～6月24日(土) 場所:柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。

詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。